ポスト社会主義都市における共同性の再生の試み
――ポーランド、ノヴァ・フータ地区の事例から――

京都大学　菅原祥

1　目的

本報告では、かつてポーランドで「社会主義の町」として計画・建設され、体制転換後は経済状況の変化などによって衰退の一途をたどっているノヴァ・フータ地区（クラクフ市）に焦点を当て、そこにおける地域コミュニティの「共同性」が、ポスト社会主義の現在の文脈の中でいかに再生可能かを論じる。

2　調査地の概要

ノヴァ・フータとは、1949 年からはじまるポーランドの「6 カ年計画」の一環として建設された、当時ポーランド最大の巨大製鉄コンビナートおよびそれに付随する町の名称である。かつてこの街は、当時の「社会主義建設」のプロパガンダのなかで、「ポーランド最初の社会主義の町」として国内・海外に広く喧伝された「ユートピア都市」であり、またそこの住民は製鉄所に支えられた安定した生活と、強固な住民同士のつながりを享受していた。彼ら住民の多くはノヴァ・フータ建設と共にポーランド国内各地の農村から立身出世を夢見て移住してきた若者たちだったのであり、彼らが共通して持つ農村的なバックグラウンドとノヴァ・フータ建設に従事した体験が、これら住民たちの間の強固な共同性の基盤となっていたのである。

しかし、体制転換によってこのノヴァ・フータの姿はがらりと変化した。体制転換と共に押し寄せたポスト産業化と新自由主義の波にもまれ、製鉄所の業績は急激に悪化し、規模縮小を余儀なくされ、かつての住民生活を支えていた製鉄所の存在感は大きく後退した。それとともに、かつてノヴァ・フータの住民たちを支えていた住民同士の強固な一体感、共同性もまた消失してしまったかのように思われる。そうした中、現在ではノヴァ・フータにおける過去の歴史に改めて目を向けたり、住民同士の間のつながりを再生しようとする試みもまた、住民の側から興りつつある。

3　分析方法と最終的な狙い

本報告では、報告者がノヴァ・フータにて行ったインタビューを主としたフィールド調査および文献調査から、ポスト社会主義期におけるかつての産業都市・工業都市において、とりわけ過去の記憶や共通の経験を基盤としたかたちでの地域の共同性の再生がいかにして可能なのかを、住民の語り、地域におけるさまざまな活動、およびメディア上における言説などから検討する。最終的に、ポスト社会主義のみならず、より広い後期近代のポスト産業化社会の文脈において、過去の産業化の記憶をよりどころとした共同性の再生についての示唆を得ることが、本報告の狙いである。